

英国のヒーロー犬&猫

英国人は動物好きの国民としてよく知られていますが、犬や猫をペットとして愛するだけではなく、ヒーローやセレブリティ、公務員としても扱ってきました。そんな英国人と動物の結びつきから生まれたストーリーをご紹介します。

テリア犬グレイフライヤーズ・ボビーは 19 世紀のヒーロー犬です。彼は主人亡き後、主人の墓を 14 年間も守り、スコットランドのエディンバラで有名になりました。スコットランド版ハチ公フライヤーズ・ボビーの像は、エディンバラのパブ、Greyfriars Bobby's の正面にあり、日本のハチ公と同じように彼の話は映画化されました。 ※参考サイト①②

黒と白の雑種犬ピクルスは 1966 年の国家の窮地！？を救ったことで有名です。イングランドでワールドカップが開催された 1966 年、大会開催の 4 ヶ月前に展示中の優勝カップが盗まれましたが、ピクルスは新聞紙に包まれたカップを見事、庭の生け垣の下から発見したのです。もちろん、彼は祝勝会でお皿をなめまわすというご褒美をもらいました。残念なことに、彼は猫を追いかけているときに、自分のリードで息を詰まらせて死んでしまいました…。 ※参考サイト③

動物達はテレビスターでもあります。その一匹プリンスはご主人の助けを借りつつ、微妙な鳴き声(?)で‘ソーセージ’と言葉を発する得技で、束の間有名になりました。真偽の程は皆さんこちらで。
(<http://uk.youtube.com/watch?v=9tYAKiuaMZE&NR=1>)

猫も活躍しています。首相官邸では、100 年に渡って 100 ポンドの年俸でネズミ捕りの猫が飼われていました。その中でも、鼠捕りの責任者/猫 (Chief Mouser) ウィルバーフォースは 1000 匹以上の鼠を捕まえながら、17 年以上に渡って 5 人の首相に仕えました。しかし、ブレア元首相が首相官邸に入ってから、猫嫌いであった首相夫人シェリーと当時の鼠捕りの責任者ハンフリーとの不仲説が流れ、1997 年 11 月にハンフリーは田舎ヘリタイヤしたと発表されました。様々な噂が飛び交いましたが、ブレア元首相夫人はハンフリーを追放したのでしょうか？ 真実は闇のなかです。

さて、英語にも犬や猫を使った英語の表現がありますが、ご存知ですか？ 日本語での使われ方とはやや違いますね。

- 部屋などを散らかしたときには: You have made ‘a dog’s dinner (of it)’.
ちなみに ‘a dog’s breakfast’ とも言いますが、‘a dog’s lunch’ とはなぜか言いません。
- パートナーと口論し、相手 (女性の傾向が多いのですが) が黙り込んでしまったときには: You are ‘in the doghouse’.
- 腹を立てると怒鳴ったり叫んだりするけれども、本来は穏やかでおとなしい人 (pussycat) がいたら: ‘(His) bark is worse than (his) bite.’

① www.greyfriarsbobby.co.uk/home.html www.greyfriarsbobby.co.uk/home.html

② www.skymovies.com/skymovies/article/0,,80000-13464429,00.html

③ www.thefa.com/England/SeniorTeam/NewsAndFeatures/Postings/2006/04/England_Pickles.htm